

名古屋市博物館展示・収蔵環境等設計委託に関する検討会議

日時：令和4年8月28日（日）14時00分～16時00分

場所：名古屋市博物館4階第2会議室

検討委員：（五十音順）

河西秀哉（名古屋大学大学院人文学研究科 准教授）

黒澤浩（南山大学人文学部人類文化学科 教授）

半田昌之（公益財団法人日本博物館協会専務理事）※チェコ・プラハよりWEBにて参加。

真島聖子（愛知教育大学教育学部学長補佐（未来共創プラン担当））

安井奈美（社会福祉法人名古屋市身体障害者福祉連合会、以下「名身連」と略す）

傍聴希望者：なし

事務局：名古屋市博物館（以下、本文除き博物館と略す）、（株）丹青社（業務受託者）

1.開会

博物館より開会の挨拶が行われる。

博物館：本日は名古屋市博物館展示・収蔵環境等設計委託に関する検討会議に出席頂き、大変ありがとうございます。名古屋市博物館は開館後45年を迎え、施設の老朽化も進んでおります。新しい博物館となるよう、昨年度基本計画を策定しました。そこで示したように『名古屋の歴史文化から「未来」をつくる博物館』をコンセプトとしています。本年度からは展示設計を進めます。特に展示の中心となる常設展示について、皆様から広い視点での御意見を頂きたい。展示設計受託業者とともに職員一丸となり進めたいと思います。忌憚の無い御意見を伺いたいと思います。

2.検討委員・事務局紹介、挨拶

事務局：それでは会議室にいらっしゃる検討委員から、五十音順で一言頂きたいと思います。
名古屋大学大学院人文学研究科 准教授、河西委員、お願いします。

河西委員：河西です。宜しくお願いします。私の研究テーマは日本近現代史で、歴史の後ろの方です。名古屋市に生まれ、育ち、名古屋市博物館は子どもの頃から親しんだ博物館で、お声がけ頂き大変光栄です。お力になればと思います。

事務局：黒澤委員お願いします。

黒澤委員：宜しくお願いします。名古屋市博物館との仕事もずいぶん長いので、ご挨拶程度にさせていただきます。微力ながらお手伝いさせていただきます。

事務局：真島委員お願いします。

真島委員：愛知教育大学教育学部の真島聖子と申します。基本計画のコンセプトが『名古屋の歴史文化から「未来」をつくる博物館』とありましたが、本学も未来を創ることを大学のビジョンとして掲げています。未来をつくる博物館というのはみんなで

作っていくという意味だと思います。展示設計のプロポーザルの案にもみんなで作っていくという、一緒に作っていきましょうという考え方があり、そこに魅力を感じました。そのような検討にお役に立てればありがたいと思います。

事務局：それでは安井委員お願いします。

安井委員：はじめまして安井です。先生と呼ばれる立場ではないのですが、所属している団体は創立が古い団体で、名古屋市博物館のギャラリーを毎年1週間借りて名古屋市障害者作品展示会（名古屋市と名身連の共催事業、今年で56回目を迎えた）を開催しています。障害のある人にとっては大切な1週間です。今年度博物館を閉めるということで、今回はどうしようかと考えている。これから先に向けてより良い施設にとあるので、障害のある方の御意見も私を通して伝えられると思います。

事務局：半田委員は、現在国際博物館会議（ICOM）に出席するためにプラハにおられ、WEBで参加して頂いています。半田委員お願いします。

半田委員：こちらは朝の7時ぐらいです。ICOMの会議が終了し、新しい博物館の定義も採択されました。名古屋市博物館については、現職の時からお世話になっていました。久しぶりに学芸員の方の声を聞き、また黒澤委員も参加され、未来をつくる博物館づくりに、何かお手伝いできれば、力になればと思っています。

事務局：ありがとうございます。それでは事務局の紹介をさせていただきます。

（名古屋市博物館の担当者の紹介、(株)丹青社が開催日程の調整、資料の作成などをサポートすることが説明される）

事務局：資料3に基づき、本日の会議の概要を説明させていただきます。資料の開催目的については割愛いたします。検討会議についてですが、毎回2時間程度とし、議事録を作成し、委員の方々も確認して頂きます。そのため録音、録画をさせていただきますのでご了解ください。また議事録は報告書の一部として名古屋市博物館に納品させていただきます。原則公開となり、本日の傍聴希望者はいませんが、今後は希望者もいるかと思っておりますので、ご了解ください。都合5回の検討会議を開催し、今回は基本計画の概要説明とご意見を伺います。2回目は10月下旬で、展示基本設計の中間報告となります。今回頂いたご意見も踏まえて確認して頂きます。2月の月上旬は基本設計の取りまとめの時期で、改めて御意見を頂きます。3回目までは基本設計時の検討で、4、5回は実施設計に入ります。8月に中間報告で御意見を伺い、最後に令和6年1月に実施設計のまとめとして最終のご報告等行います。ただ、会議の検討内容・開催時期等は変更する可能性もあり、その場合は事前に連絡させていただきます。ここまでで何かご質問等ございましたらお願いします。

黒澤委員：3回目の会議は、入試の期間にあたる。2月上旬は難しい。大学の入試日程と調整して欲しい。

事務局：承知しました。早めに調整させていただきます。他にもお気づきの点がありましたら随

時御意見ください。

3. 議事

(1) 名古屋市博物館の魅力向上基本計画についての説明

事務局：それでは議題に入ります。基本計画の内容について博物館よりご説明頂き、ご不明の点について質問を頂きます。

(博物館より基本計画概要版について説明が行われる)

事務局：ありがとうございます。それではここまでで不明の点がありましたらご発言いただければと思います。

(委員から質疑なし)

(2) 展示の検討内容について

事務局：続いて基本計画を元に検討を進めている、今の方向性について博物館よりご説明頂きます。

博物館：宜しく願いいたします。資料5～7の、主として5、6について特に御意見を頂きたいと思います。7は現在検討している展示の内容です。次回の会議の中心となる資料となると思いますが、これも踏まえて説明いたします(資料5～7の説明が行われる)。

事務局：初回ですので自由なところから、また感じられたことなどご意見を頂戴したいと思います。

河西委員：一つ伺いたいのですが、「様々な人々の営みに光をあてる」の「人々」が資料によりひらがなと漢字がありますが、書き分けた意味は。

博物館：特にありません。

河西委員：それはどちらでも良いと思いますが、展示の中で「IV信長・秀吉・家康」がやや浮いている。三英傑は英雄史観なので、それと、前面に打ち出している様々な人々はどうか。名古屋市の施設なのでIVのテーマを取り上げるのは仕方がないが、何か工夫が必要ではないですか。目標と少しずれているのではないかと個人的には思います。この地域では3人は重要だし、豊臣秀吉の文書について博物館が研究を進めており、私もお世話になった先生が関わられている内容ではありますが。

博物館：御意見の通りで、章の組立てを考えていた時に、ここは異質と思いました。しかし市民からも期待が高く、敢えて入れています。三英傑をどこまで出せるか。三英傑という言葉は現代の考え方であるし、一方で名古屋らしいという議論もある。三英傑という言葉は他の地域では使わない。しかし敢えて出すことで違った視点から見ることはできるのではとなりました。

河西委員：歴史認識の問題と思う。三英傑は近代・現代になり作られた名古屋市独特の認識です。それをどこかで出していければ良いのですが。

事務局：他の御意見はありますか。

真島委員：「最初の名古屋人」や「尾張の誕生」はどうか。前者は一般的には縄文人といった名称が使われている。これはインパクトを出すための言葉ですか。この地域の人からすれば良いが、その問いを明らかにするストーリーがあれば良いが。今、現代に住む私たちにとって、当時の人々がどのように生活していたのかを考える時にどうか。名古屋や尾張という言葉は、近世以降に出てくる言葉と思うが、あえてインパクトのある言葉として使用しているのですか。

博物館：必ずしも（目的は）インパクト重視ではないが、シナリオをつくり歴史叙述をしていくことをしていく。一般の人々、大人でも余り歴史に詳しくない人でもわかるようにしたいです。またそれで終わるのではなく、学芸員が資料を元に研究し、歴史を解明しているということを知って欲しいと考えています。歴史に興味を持っている人でないと難しいかもしれないが、そういうことをしていきたい。そこでまずはインパクトで訴求したい。この時代の地域名称をどう表すかは難しいので。伊勢湾岸や尾張平野といった地理的な名称でもうまく伝わらない。尾張地域を扱うことには変わらない。「最初の名古屋人」は正直インパクト重視。こんなに昔から人がいたのかと驚いてもらいたいと。

真島委員：近現代のナショナルアイデンティティとも同じです。例えば日本はいつからそのように呼ばれているのかなど。そのあたりは重要な論点となるところ。それであればどこかで説明したらどうか。この博物館では縄文時代についても「名古屋人」という言葉を使うとか、説明があった方が良い。この展示ではこのエリアをこう呼ぶとか注釈を入れて、それについて議論をする意図はないとした方が良いでしょう。

黒澤委員：今の件ですが、真島委員と同じことを考えた。インパクト重視という考えは理解できる気もするが、加生沢遺跡（新城市）の遺物が展示されている。タイトルと全然あってないのではないですか。愛知県内には、県立博物館がないので、名古屋市博物館は県博的な機能を持つべきと思う。初めて名古屋市を訪問した人々が、この地域がどのような地域かを知るためには、まず市博に来ると思う。そこは大きく捉えても良いのではないかと。収蔵資料にも名古屋市以外の資料もある。市域以外の資料に説明がつかなくなるのではないかと。考えとして愛知県を代表する博物館を意識したらどうか。加生沢遺跡の資料を展示することは良いが、度胸があると思った。

博物館：加生沢の遺跡の資料は考古学で議論があります。考古資料には石ころか石器かわからないものがあります。加生沢については後期石器時代以前の石器かどうか議論がありますが、研究活動を示す資料になると思います。元々個人が所有していた資料が、数年前に博物館に寄贈されました。資料の全てが駄目というわけではなく、後期旧石器より前の時代のものがその中に入っているかどうか議論となっています。歴史研究には議論があるもので、そのプロセスをいろいろな視点から来館者

に見て欲しい。ただ、取り上げることには若干心配もあります。

事務局：他に御意見は。

安井委員：博物館への最初の一步として館に来てもらうには、非常に良いのではないかと思います。みんな名古屋の人だよというのは来館者に響くメッセージだと思います。展示の内容も面白そうですし。施設をどのようにバリアフリー化するかは、ここでの議論外かもしれませんが、来館した人にどこまで展示を伝えられるかは重要です。お子さんとか、長く名古屋に住んでいるとかなどにより視点も異なります。例えば視覚障害者、聴覚障害者は展示の一部しか入っていきません。聴覚障害者の人だと、音の出る展示は説明がないとわからない。芸術や文化へのアクセスはソフト面でどうしていくかを考えることが大切だと思います。博物館の方が説明してくれると内容がよくわかります。例えば名身連の会長は後天的な視覚障害者で、名古屋城が焼失した戦災も自らの目で見て記憶しています。展示の内容を順々に巡っていくなかで、博物館の展示で追体験してもらいたいと思ったので、どのように伝えていくのかは丁寧に考えていただきたい。

博物館：館全体でバリアフリーも考えないといけないと思っています。名古屋市の基準を元に検討しています。展示室に関してはすべてに対応ということは心許無いこともあるが、バリアフリーにすることで、障害をお持ちでない人にも分かりやすく、利便性の高い施設になると思っています。次回にでも考え方を示したいと思っています。

黒澤委員：展示室への移動は階段とエスカレーターか。

博物館：館内の移動手段は今と変わりません。

黒澤委員：バリアフリーでいうと、車椅子のアクセスがどうかと思う。エレベーターが1基しかなく、職員と共有ではないか。このエレベーターを待ったりするのはどうかと。フリーアクセスにするためには、エスカレーターも1基では足りないと思う。身障者やお年寄りが使うにもどうか。また常設展示室を広くするために、2、3階に分けているが、先ほどの話も含めアクセスはどうか。展示室は2300㎡ぐらいですか。最近、広い展示室は観覧するのに疲れるようになった。ルーブル美術館などは途中で休憩できるようになっている。市博の規模感でいうと、なかなか休憩スペースを設けるのは難しいと思うが。この計画では何歩ぐらい歩いて、所用時間はどれぐらいか。今は「博物館疲労」という専門用語もある。そのあたりは考えないといけないのではないかと思う。

博物館：今の常設展示室でも観覧するのに1時間以上かかります。それをさらに広くします。常設展示室を2フロアに分けることで、途中で自由に休んでもらうことができるのではないかと考えています。また3階だけ見て帰る人もいるかもしれないし、どこかで休憩してからまた観覧する人もいるかもしれません。強制動線ですが、3階を見て帰る人が、次に2階を見に来ることも期待できます。そういう意味で常設展示室を2フロアに分けることは前向きに受け入れています。以前

に少人数の大学生に協力してもらい、今の常設展示室をどのぐらいの時間で観覧するかを実験しました。40～60分ぐらいで観覧してくれました。それを元に第1部（3階）と第2部（2階）、それぞれ観覧時間は40分ぐらいかと思っています。また展示室内に椅子を置こうと思っていますが、今はぎっちり展示があります。体験型の展示もあります。

黒澤委員：もっと自由動線として、プラザから自由に展示室に入るようにすることもできる。展示室が広くなると観覧が大変だと思う。

博物館：開館しないとわかりませんが、片方だけ見て帰る人が多いのではないかと思います。

黒澤委員：自分の見たいところに行くのに全部見ないとたどり着けないのはどうかと思う。

構成も含め、レイアウトを考えてもらえると良い。

事務局：展示のアイテムも数が多いので、例えばおすすめコースを作り、それをICTを使って観覧してもらおうとか、来館者個々の興味や関心に合わせた観覧方法検討している。

黒澤委員：おすすめコースを作るのは良いと思う。

真島委員：会議の前に常設展示を見ました。猫を探す展示があり（「秀吉さまのねこさがし」常設展示内のクイズラリー）、展示のところどころに猫が出てきました。親子づれや小さい子ども向けの猫を探すスタンプラリーです。展示のポイントに行くと猫が隠れています。展示を全部見る必要はなく、新しい視点で面白いと思いました。また視覚障害者、聴覚障害者の方でも楽しむことができるコースがあれば、面白いと思います。子どもたちに向けては、「なぜ？」という問いを立ててもらいたいです。例えば土器は時代により模様、厚さ、材質が変わるとか、説明があるだけでなく、ワークシートに時代変遷による土器の違いを書いてみるとか、探求してみる。三英傑も、なぜこの地域で三英傑といわれる人物が現れたのかという問いを立ててもらおう。この地域から生まれて全国を制覇したのはなぜとか、小中学生が学ぶことができる仕掛けを作ってもらえると学習には良い。

事務局：半田委員が手を挙げてくださっていますので、お願いします。

半田委員：博物館の説明を伺い、学芸員のシナリオ作りへの熱意を感じました。一方で入館者の視点で見ると、強制動線でこれだけの展示は規模が大きいので疲れるかと思う。2階に降りてくると満腹感を感じるのではないか。他時代の人を思い描きながら観覧しようとする、資料に対してどういうバックボーンを持っているのかの解説が必要。当時の人々はどのようなことを考えるためには、遊びやゆとりを持った展示でないかと来館者の気持ちがついていかないと思った。そのために3点意見があります。1つは各テーマの独立性を作り、そこだけ見れば何かイメージが固まる展示をしたらどうか。市民はその塊を3、4回見てもらおう。1回で全部を観覧して欲しいとアピールしない方が、リピーターづくりとしては良い。もう一つ、プランにはベンチが置いてあるが、余りゆったりした感じが無い。頭が疲れた

時には、違う雰囲気の中でゆっくり休める場所が作れると良い。2点目は今まで来館していなかった利用者が出てきているが、身体障害者、高齢者、未就学児を呼び込むという気持ちもあると思う。点として観覧ポイントを作るのではなく、それぞれのようなプログラムとハードを組み合わせて観覧してもらうか。例えば未就学児はこういうコースをどのように歩きなさいと。目の不自由な方が博物館に来た時は、こういう楽しみができるのか。どういう見学コースがあるのか工夫してもらう。3点目は、これは箱ものとしてのプランであるが、これからの時代は施設に訪れない人を含める提案が必要だと思う。バーチャルの常設展示室を作り、いつでも誰でも観覧できるようにすると良い。ギャラリートークや解説、来館した人への対応に、付け足しではないバーチャルなプログラムを作っていくべきだと思います。以前はバーチャルを見ると、施設に人が来なくなると心配する人もいたが、情報を提供すればするほど施設に行きたくなくなるということを戦略的に考えていった方が良い。名古屋の展示から入ることを否定はしないが、県立の博物館がないので、県域の中核施設という位置づけや視点は、全体の考え方として持つべきではないか。

博物館：3番目の御意見、インターネット世界との共存は、委託業者とともにしっかり検討したい。どこまで外に広げるかは、大切な課題です。休憩スペースも課題と思っています。また県域を扱うかどうかですが、今の常設展示も尾張の歴史を扱っています。少し広げると愛知県となります。岐阜県や三重県に由来する資料も収集しています。ただ愛知県との関係もあり、取り上げない部分もあります。

安井委員：障害者の作品展の会期中にパノラマ撮影しています。それをホームページでバーチャル作品展として公開しています。そのおかげもあり、私も参加したいと応募する障害者もいて、以前は300点ぐらいの応募が、今年は400点になりました。また中には会場に来ることができない人もいます。重度の障害がある人や知的障害者などは、施設で観覧できる状況に自らをもっていくことはできません。VR環境があることはすごく大切なことで、そういった障害者は映像が動く、観覧を実感できます。またバリアフリーの観点から、強制動線はどうかと思います。障害者によってはカームダウンスペース（気持ちを落ち着かせることができる空間）へと抜けていけることが大切です。

河西委員：バーチャル空間は難しく、余り整えすぎると人が見にいかなくなります。本当に工夫しないといけないと思います。大学の学生にレポートを求めたら、施設に行くのではなく、デジタルでの観覧だけでレポートを書いています。そういう学生が増えました。うまくやって欲しいです。整えすぎるのも難しいです。

事務局：御意見は承知しました。

黒澤委員：場の魅力というのがあり、行きたくなくなるような魅力のある場にして欲しい。本と同じ、紙の本を学生が最近読まなくなったが、聞いてみると読書は情報を得るため

のものなので、ネットで足りるという話もあった。読書の体験がそのような形に成り下がってしまっている面もある。それには豊かな経験が含まれるのだよ、と。デジタルで情報を提供するとしても、施設に来ればそれ以上のものがあると。

博物館：展示というのはその場で得る感情も大切で、むしろそれを提供しないといけないと思っています。五感に訴えるものなど。インターネットは見るだけですが、感じる場所とか。

真島委員：なぜ、直接足を運ぶのかではないかと。今日の私の体験でいえば、猫を探していたあの親子連れの姿に感動しました。私が理解できなかったことが、子どもが探す姿を見ることで意味のある体験になりました。他者の私が訪れて良かったと思う。それは直接博物館に行かないとわかりません。共感するということが大切だと思います。展示を見て、あなたはどんな未来をつくりたいと感じましたかと意見を集めるのも良いと思います。人を通して経験する、障害のある人が展示を楽しんでいる姿を見て、歴史を通じてこんな名古屋にしたいと、地域にしたいとか書くことも大切だし、他の人の意見を見て共感を得ることも大切です。どういう風に共感を生み出すことができる交換をつくれるか。エンディングを上手に使い、共感できると良いと思います。

博物館：博物館の展示を静かに観覧できることを好まれる方も多いのですが、私自身はもっとしゃべってもらっても良いと思っています。例えば伊勢湾台風の特集展示の際に、実際に体験した人が展示を見て、たまたま居合わせた方に話しをするようなことがありました。観覧文化も変わってきていると思いますが、対話が生まれるように、どう実現するのかです。

黒澤委員：展示構成についてですが、今の歴史系博物館はストーリーがあり、それに見合う資料を展示している。しかし資料に関する説明が決定的に欠けている。大事なのは資料6「常設展基本シナリオ」。研究のプロセスでも良いし、どう研究したという資料の位置づけを示して欲しい。それを行えば、真島委員の意見にあった歴史や資料への疑問が生まれ、来館者とのやり取りが生まれてくると思う。その部分が日本の博物館には不足している。研究成果が展示に反映されるべきで、研究をもっと前面に出して欲しい。常設展示の目標として、来館者が身近に感じとあるが、どうやったら身近に感じることができるのか。いろいろな場で発言しているのは、今の我々が抱えている課題に対して展示で答えるとあるが、逆の発想にしたらどうか。今の名古屋市の課題から始め、それを考えるために歴史を遡るという試行実験を行ったらどうか。現在が起点となる。最近、歴史展示についてそのような考えを持っている。そのようにすれば、来館者が歴史を身近に、リアルに考えることができる。また資料5の祭礼展示はコンテンポラリーなものか。山車と年中行事は固定的な展示か。

博物館：山車は固定ですが、年中行事は展示替えを行います。

黒澤委員：2部には民俗展示はないのか。

博物館：「わたしたちの名古屋市へ」の「iii復興と高度成長」、「ivわたしたちの名古屋」には民俗資料が展示されます。図面のP8の最後のあたりが民俗的な展示です。歴史としての展示に民俗資料が入ります。小学校3年生は名古屋の昔のくらしを学ぶ授業があり、それに対応しています。

黒澤委員：三英傑の展示が浮いている。これを常設展示から外してトピック展示にしたらどうか。

博物館：三英傑はこの時代のトピックとして取り上げるという考えから始まっています。この3人が現れ、どう勢力基盤を作り、全国を制覇という流れになる。その前に津島、熱田といった中世のまちから紐解いているので、地域としてのつながりを表しています。三英傑を別のところに移動すると、中世からいきなり飛んで近世にいつてしまう。人々のくらしはおさえるので、三英傑は取り上げたいと思います。

黒澤委員：それであればタイトルは検討して欲しい。

河西委員：学習指導要領が変わり、高等学校には新たに「歴史総合」が設けられました。そこでは日本史を覚えるのではなく、調べようとか、調べるためにはどうしましょうかと。それを学校現場は求めています。この資料をこう解釈したらこのストーリーが生まれたと、そこで生徒に考えてもらうとどうか。今までの博物館を理解してもらうということより、博物館から出発してもらうと。歴史教育のトレンドもあります。研究を前面に出してもらった方が良いと思います。最初、こういう風だと提示してもらえると、でも違うという生徒がいるかもしれません。

博物館：どこまで説明できるかもあります。現代から始めるという案も一度検討しましたが、難しいとなりました。強制動線については、2層のフロアにわかれているので良いかと。また複数のコースを作り、ICTを用いて観覧することも考えています。

真島委員：未来をつくるために今の課題がどのようなかであるか、何が課題かは難しいのでは。小さな「どうして」があると良いと思います。授業にも大単元と中単元があります。新しい問いを一つ、二つ解明していく中で、資料を読み解いたり、そこから生まれる議論を重要視させたりしたいと思います。探求的に学ぶことが大切だと思います。問いを立てると身近に感じる。例えば土器、素朴な疑問として土器はなぜ重要なのか考える。土器がなかったら煮炊きはどうしたのとか。佐倉の国立歴史民俗博物館では、土器の無い時代の蒸し焼きの手法を展示しています。土器が発明されたように、それぞれの時代に発明があり、生存をかけてとか、幸せにするためにとか、そういうことが解き明かされていくことは、切実感を持つことだと思います。なぜ鍬が、なぜ土器が必要だったか、その問いを立ててもらうこと、そうすると「切実的な身近さ」というようなものが生まれてくるのでは。弥生時代になると戦いも始まり、村を守る必要があったとか。その時になぜ鍬が必要かという戦いのためということがわかればよいのではないのでしょうか。展示だけで伝えるのが難しいことは

ワークシートや学芸員の話で補うなどをすれば、来館者は考えます。私も本日観覧して、例えばなぜここにパレススタイルの土器が生まれたのかとか。素朴に考えるとなぜ赤いのかとか。古代なら古代、中世なら中世で、それぞれで考えると、一つのブースでも豊かになることができる。ゆっくり展示を見ることができる。

博物館：真島先生のお話は、黒澤委員のおっしゃった「研究」とつながってくると考えて良いですか。

黒澤委員：良い。

博物館：「なぜ」は学芸員が考えて課題設定をしていくと思うので、そこを分かりやすくということでもよろしいですかね。ありがとうございます。

黒澤委員：課題に答えていくことも大事だが、実は我々が想定しないことを子どもたちは考えてくる。答えてもらうだけだと、それは博物館的な「問い」ではない。突拍子の無い考えを博物館側が拾っていく。そのためには展示替えがしやすくした方が良い。自前の研究が進むと展示を変えていかないといけない。

博物館：今の常設展示は平成元年に設置したものです。展示の更新は大切だと思っています。体験型の展示は慎重にと考えています。

河西委員：我々は現代を生きていて、興味や関心も変化する。例えば今の関心事はウクライナとか。そのため展示を更新していかないと、陳腐化してしまう。ある時期の興味や関心で展示を作っていくが、変えられないといけないと思います。

黒澤委員：これからの作業になるが、学芸員の皆さんで展示する資料のどこが魅力なのか、博物館内で担当者がアピールする機会を設けたらどうか。作業プロセスとして何が面白くて魅力的かをアピールする場を作ったら、資料の見せ方も変わるのではないか。良い展示にするために。

博物館：大型の展示について、各学芸員は検討したが、また小さなものまでは検討が進んでいない。

(3) 設計時における多様な方々からの意見聴取について

事務局：閉会時間が迫っているので、議題(3)に進みたいと思います。(資料8「設計時における多様な方々からの意見聴取について」を説明する。委員から特に質疑は無し。)

(4) その他 次回日程について

事務局：それでは、次回日程ですが10月下旬で調整させていただきます。他に御意見がありましたら。

河西委員：近現代の解釈は難しい。できれば多くの専門家の意見を聞いた方が良い。慎重に進められた方が良いと思います。

博物館：当方もそれについて理解していますので、またご相談させて頂きたい。

真島委員：高等学校の管轄は県で、この施設は市なので意見聴取の対象には入っていない。しか

しきほど河西委員から意見があったように、高等学校の科目が変わってきている。高校生や高校の先生に施設を利用してもらうためには、ヒアリングした方が良いでしょう。

事務局：本日は大変ありがとうございました。次回の会議資料等はメールで配布させていただきます。

半田委員、最後に何かございますか。

半田委員：特にありません。

4.閉会

事務局：ありがとうございました。以上で本日の検討会議を終了させていただきます。

—以上—